

FIELD NOTE

no.165



**WILDLIFE
MANAGEMENT
OFFICE**

2025.1

目次

FIELD NOTE 2025年1月号 No.165

-
- 1 年頭あいさつ 奥村 忠誠
- 3 糞塊密度調査の始まりと（私は）おわり 岸本 真弓
- 7 野生動物管理にもサイエンスコミュニケーションを盛り上げたい 林 航平
- 10 ニホンザル研究の聖地を訪ねて—宮城県金華山・長野県上高地編— 浅見 真生
- 学会参加報告
- 14 学会参加報告 赤松 萌鈴
- 15 哺乳類学会参加報告 井上 莉央南
- 16 学会参加報告 野生生物と社会学会 —公共政策学としての野生生物管理学— 島田 駿
- 17 新人紹介 松山 みのり
中嶋 英輝
- 19 WMO活動報告 2024年10月～12月
- 2 表紙の絵 中島 彩季
-

年頭あいさつ

(株) 野生動物保護管理事務所
奥村 忠誠

新年あけましておめでとうございます。昨年も多くの方々のご協力のもと、私たちの企業理念である『豊かな自然と感動を未来に、人と野生動物の明日を想い今を創造する』を目指した活動を進めることができました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

国内の野生動物保護管理の動きに目を向けますと、昨年は、クマが指定管理鳥獣に指定されたことにより、国や多くの自治体でそのための取組みが始まりました。取組みは始まったばかりですので、より丁寧な対応と方針作りが必要となり、それに対してこれまで培った経験に基づいてそれぞれの自治体にあった提案と実行を心がけて進めてまいりました。

また、効率的なモニタリングを実施するために新しい技術の活用にも取り組んできました。ドローンはすでに多くの場面で活用が始まっており、多様な目的での使用方法について検討を進めています。そのほか、これまでの課題を解決するために新たな統計データ解析にも力を入れて取り組みました。今後はこれらの成果を基に、さらに実効性のある施策につながるような提案をしていく予定です。

一方で、実際に野生動物の被害に直面している市町村や集落に着目すると、日本全体として人口減少や高齢化が進み、地域においては対策に関わる人や予算の不足、野生動物やその対策についての知識が浸透していない状況があり、先が見えず困っている地域が多くあると感じています。このような現状に対して、これまでと

同じようなアプローチだけでは問題解決につながらないのではないかという思いもあり、WMOができる問題解決方法について検討を進めてまいりました。

こういった社会情勢の変化や技術の進歩に今後も継続的に対応し、必要な技術開発や取組みに力を入れられるように、昨年9月にWMOは組織再編を実施しました。

体制変更により本社機能として情報管理室、経営戦略部を新設し、WMO全体の機能強化と結束力強化に取り組んでいきます。また、これまで調査事業部としていた部の名称もより私たちの役割が明確に伝わるようにワイルドライフマネジメント事業部（略称WM事業部）へと変更をしました。そのWM事業部には新たに福島事業所と地域支援室を設置しました。

東日本大震災直後から福島県浜通り地域では野生動物による問題が多く発生しています。WMOも2018年以降、帰還困難区域が解除された地域を中心に自治体の担当者をサポートする形で野生動物の被害対策に関わってきました。しかし近年は当初よりも多面的な対策が必要になってきたことや地域で生活している人たちと共に野生動物の問題に取り組む必要性が高まったことから、より現場に近いところで迅速に対応することを目指して、2024年10月に浪江町に福島事業所を開所しました。この事業所ではこれからもその地域の在り方にあった活動を地域の人たちと共に考えて進めていきたいと考えています。地域で生活している人と共に野生動物

問題に取り組む必要性は福島事業所の周辺だけでなく、他の部署が関わっている地域でも必要であり、そのノウハウの蓄積や開発が必要となっています。そのためこういった業務を仕組みや技術の面からサポートする部署として地域支援室を開所しました。日本は今後も人口減少と特に都市部以外での過疎化が見込まれています。その時に行政がこれまでと同じように税金を使うだけで、そういった地域をサポートできるでしょうか。今後は地域のことは実際に住んでいる人たちが考えて取り組んでいける仕組みが必要になってきます。そのような取組みに私たちも伴走させてもらい一緒に考えさせてもらいたいと思っています。

2025 年はこれまで培った知見と経験をさらに発展させ、多くの地域で活動を進めていきた

いと考えています。新たに活動を開始した地域支援についても力を入れていきます。この野生動物保護管理も多様な人が関わることでブレイクスルーが起こる可能性が高まります。そのためには、社内に多様な人材が集まり、社外の多くの関係者との連携が必要となります。そのような取組みにも力を入れていきたいと考えています。2025 年は、WMO としても新しいフェーズに入っていく年になると考えています。社員一同、これまで以上に知識と技術を磨き、地域社会や行政のお役に立てるように努力を重ねてまいります。

本年も引き続き、ご支援とご指導を賜りますようお願い申し上げます。皆様にとって希望に満ちた一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。



表紙の絵

ツキノワグマの胸の斑紋は個体ごとに多種多様な形状をしています。

昨年は個体識別のため、センサーカメラで撮影されたたくさんの斑紋と睨めっこしました。

今年の干支であるへびのような斑紋を持つ個体もどこかにいるかもしれません。

中島 彩季 (ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社)



初期の調査票と現在の調査票を比較すると、当時はこの一つ一つの糞塊について記録する方式の調査票で事足りたという事実から、発見糞塊数の少なさに驚かされる。同じルートを20年後くらいに実施したが、この様式だと5~10枚以上は必要となってしまう。また、1997年当時から、ルートをいくつかに分けて、その場所の植生や下層植生の量と糞塊密度が関係がありそうと思わせる状況であったこともわかる。その後、ルートを小ピークや鞍部や傾斜角度が大きく変わるところなどの特徴的な地形で300mくらいの小区画に区切って記録をとるようになった。現在の調査票の「区域」というのは、その小区画のことである。

現在のような様式の調査票になって20年以上経過しているが、小区画で区切って記録をしていることが、役に立つことがある。たとえば区画法(1km²の範囲を10人程度の調査員でくまなく歩き目撃したシカの数で密度を算出する密度調査法)と、区画法を実施した場所に接する小区画のみを抽出した糞塊密度との間には強い相関関係があることがわかったし、ルートを途中大きく変更せざるを得なかった場合でも変更していない場所だけの比較が可能となった。

また、シカの糞塊密度(利用頻度)に影響を与えるものは何なのか、植生や下層植生の量、傾斜度、登り下りかといった多くの要因についての解析も可能である。数年前からWMOでは独自の研究として糞塊密度調査からわかることや、本当に生息密度の指標となっているのか、5kmメッシュで尾根上を5km程度歩くという現在の手法は妥当なのか、10粒以上10粒未満にわけた上で指標として10粒以上のみを用いていることは妥当なのかといったことの解析を進めてきている。現

在ある程度の結論は出ているが、近い将来論文文化することを目標としているため、紹介は次の機会に譲ろうと思う。



糞塊密度調査をしていると、いつもなにかしらの気づきがあるのがこの調査の楽しみである。

暑かった今年の秋、10粒未満の糞塊をいつもより多く見つけたような気がした。糞塊をつくる糞粒の数は排出されてから時を経て減少していくが、これは風雨によって粉砕・流出されることにもよるが、多くはオオセンチコガネなどの糞虫が持ち運んで食していることによる。糞虫は基本的には気温が高いほど活動性が高いため、冬には活動しなくなるが、秋はその年の気温によっていつまで活動が続くかが決まるのである。ただ、調査地は広い範囲に散在し、同じメッシュ内でも標高が異なり(標高が100m高いと気温は0.6度低くなる)、植生や斜面方位、陽当たりによっても気温が異なってくるため、微気象を把握することは難しく、さらに、影響があるのはおそらく調査当日ではなくその前何日間か十何日間かの気温であろうから、調査メッシュや小区画ごとの気温と糞塊密度との正確な関係性を明らかにすることはほとんど不可能である。そのため、糞塊密度調査は糞虫が活動しなくなる10月下旬頃から、できるだけ北の地方から調査開始しているのであるが、今年は11月上旬くらいまで暑かった。

そんななか、歩きながら、10粒未満糞塊の出現頻度割合で糞虫の活動性の高低、つまりシカの密度に関係のない糞塊数のゆらぎを明らかにできるかもしれないと思った。10粒未

満の糞塊数は、これまで密度指標には用いておらず、また何かの解析の対象にもなっていないが、新たな指標として使えるかもしれない。ただし、これまで10粒未満を密度指標に用いてこなかったのは、10粒未満の糞塊は経験や注意力といった人による差がしやすい指標だと思ってきたためであることから、もう少し検討の余地はあるだろう。



シカ糞を運ぶオオセンチコガネ



糞塊密度調査の最大の秘訣かつ必須条件は調査員の「誠実さ」であることから、人による影響は除去できないというマイナス面があることは否めない。そこを払拭するセンサーカメラやドローンのような機械的な調査が糞塊密度調査にとってかわる時もおそらく近い将来くるのだろう。だが、糞塊密度調査には糞塊密度だけでないものを得ることができるという最大の武器がある。

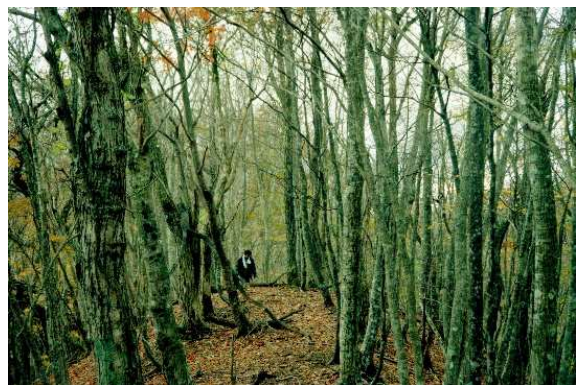
例えば、数に影響を与えそうな小さな環境変化に気づく。

近くで伐採があった。伐採した木がその場においてあって、シカはこの尾根を利用しな

いじゃないかな。植林木の伐採が進んでシカの餌場となる草地が出現しているので、今後シカが増える可能性がありそうだ。森林に接する田んぼに防鹿柵が設置され、山から下りてくるシカが減りそうだ。これらのことは、調査ルート of 糞塊密度が変化していても、一帯のシカの密度が変化していない可能性を示唆するものである。

数だけでない、微妙な糞塊の変化や痕跡でシカの生息状況の変化を知ることでもできる。調査は一般的に秋に実施するので当歳子の糞は成獣や亜成獣のそれと比較するとふたまわりくらい小さい。だから、当然糞も小さい。今年は小さな糞が目立つなあと思う年がある。これって・・・？ 特殊な事情で調査を春に行う地域がある。春の調査では、雪に冷蔵保存された超古い糞が多数見つかる。それが少ないなと感じるとき、これって・・・？ 糞は見つからないが、食痕があることはシカの存在を示している。

もちろん、シカ以外の動物の痕跡の多寡や、そのありよう、なにかしらとの関係性などもじっくり歩いているからこそ気づくことができる。鳥類に詳しい人ならば、季節による、年による渡り鳥の去来の差にも気づくだろう。



調査風景



調査風景

機械的に糞の数を数えるのではなく、歩くという原始的な手法ながら、人間の五感、それに第六感、そして知識があれば、森林にちりばめられているたくさんの有益かつ重要な情報を得ることができるのだ。



私が WMO に入って 34 年経った。糞塊密度調査は WMO で行ってきた調査で最も好きな調査だった。その楽しみは過去の本誌に 3 度にわたって書いてきた (97 号、99 号、101 号)。小学校 6 年生の時、先天性股関節形成不全だと診断され、やってはいけないこととして「お姉さん座り」「ハードル競技」「山登り」と言われたのに、「山登り」を仕事にしてきた。酷使に対し沈黙を守ってきた股関節が還暦を迎えて悲鳴をあげはじめた。歩いているときは大丈夫なのだが、翌日に痛みを持ち越す恐れがでてきたため、私は糞塊密度調査からの撤退を決意した。それから 2 年、調査参加日数を徐々に減らし、なんとか途中リタイアすることなく、やり遂げられた。最後までがん

ばった私の股関節に感謝である。

今年度最後の調査時、クアークアークと声が出て、上を見た。まだ落葉していない梢の囲まれたぼっこりあいた空の真ん中を黒い影が一直線に飛んでゆく。ふうっと息を吐いて、糞を探す集中力をとくと、さわさわと木の葉が揺れる音の向こうからジューーと虫の声がしていた。人里では夜にしか聞こえない虫の声が昼間に聞こえている。それだけ山が静かなんだなあと今更のように気づく。約 30 年間、たくさんの気づきをと生きがいと幸せをくれた私の糞塊密度調査が終わった。

野生動物管理にもサイエンスコミュニケーションを盛り上げたい

林 航平 (ワイルドライフマネジメント事業部 計画策定支援室)

サイエンスコミュニケーションとは？

読者のみなさんは「サイエンスコミュニケーション（科学技術コミュニケーション）」という言葉聞いたことがあるでしょうか？サイエンスコミュニケーションとは、科学に関する情報を専門家（科学者や研究者など）と非専門家（一般市民、政策立案者、教育者、メディアなど）の間で効果的に共有し、理解を深めることを目的とした活動やプロセスのことです。また、実際にこれらを実践している人のことを「サイエンスコミュニケーター（科学技術コミュニケーター）」と呼んだりもします。この分野では、科学的な知識や技術についての正確で分かりやすい情報提供だけでなく、双方向の対話や意見交換も重要な役割を果たします。この双方向性というのがミソになるキーワードで、例えば講義や研修会などで講師が参加者に一方的に知識を授ける、伝える、といったことはサイエンスコミュニケーションとは呼びません。コミュニケーション、というだけあって双方向性であることが大切になります。このサイエンスコミュニケーションの考え方は特に以下のようなポイントが重要になってきます。

①科学の普及と理解の促進

科学的知識をわかりやすく伝えることで、科学に対する関心や理解を深める。

②意思決定のサポート

政策や社会的課題に科学的知見を活用できるよう、非専門家が十分な情報を持って判断できる環境を整える。

③信頼関係の構築

科学と社会の間で信頼を築き、科学への誤解や不信感を軽減する。

④科学教育の補完

学校や教育現場だけでなく、日常生活の中で科学を学ぶ機会を提供する

上記のポイントのようにサイエンスコミュニケーションには科学と社会をつなげる役割があります。現代社会では、気候変動や新型コロナウイルス、エネルギー問題など、科学技術に関連する課題が多く存在します。これらの課題を解決するためには、専門家と非専門家の協力が不可欠であり、科学的な知識や理解が広く共有されることが重要です。また、科学への誤解やフェイクニュースが拡散するリスクもあるため、正確な情報提供と批判的思考を促進するサイエンスコミュニケーションの役割がますます重要になっています。

野生動物管理に必要なサイエンスコミュニケーション

今更言うことではないですが、現在の日本では様々な野生動物が農作物被害や人的被害の増加、生態系の変化など、社会と自然環境の両方に大きな影響を与えています。また、最近ではクマやサルなどの市街地出没が起きるたびにメディアで取り上げられ社会的な注目を浴びることもあります。さらに現場に近いところにフォーカスすると、野生動物管理に関わるステークホルダーは専門家と行政（国・都道府県・市町村）、地域住民と、関係者が多く、合意形成や意思決定が複雑化しています。このような状況であるため、野生動物管理においてもサイエンスコミュニケーションの視点を持って調査・研究、アウトリーチ、政策立案などを積極的に行う必要があると思います。例えば、実務者としての立場からは以下のようなサイエン

スコミュニケーションのアプローチが効果的でないかと考えています。

①住民参加型アプローチの促進

野生動物管理は、地域住民の協力なしには成り立ちません。サイエンスコミュニケーションの双方向性を活かし、住民の意見や懸念を取り入れながら、科学的根拠に基づいた対策を実行することが重要です。たとえば、電気柵設置の必要性や果樹などの誘引物の処理の効果を、ワークショップや説明会を通じて共有することで、地域住民の理解と協力を得ることができると考えられます。

②データを基にした誤解や偏見の解消

科学的根拠を共有することで、野生動物に対する誤解や偏見を解消できます。たとえば、「クマが増えすぎているからすべて駆除すべきだ」という意見には、個体数調査や生態系バランスを示すデータをもとに冷静な議論を促すことができます。科学的視点を共有することで、感情的な議論を避け、建設的な解決策を導く土台を築くことができます。

③教育と啓発活動の重要性

長期的な野生動物管理を実現するためには、次世代への教育が不可欠です。学校や地域イベントを通じて、野生動物の生態や共存の必要性を学ぶ機会を提供することは、未来に向けた意識向上の基盤となります。また、メディアやSNSを活用した情報発信も、広く社会に科学的知識を普及させる手段として有効だと考えます。

哺乳類学会に参加して思うこと

ちょっと脇道に逸れますが、哺乳類学会に参加して思ったことがあります。それは、哺乳類学会の参加者層の肩書に偏りが見られるという点です。前回の学会でのできごとを回想したいと思います。

「石を投げればWMOに当たる」と某Y大学の先生が言っていました。それくらい哺乳類学会にはWMOの社員が参加しているようです。確かに学会の要旨の参加者を見ると「WMO」と書

かれた参加者がやたら目に入ります。WMO社員の目線だと気づきませんでした。他の学会からするとあっちの自由集会にも、こっちの自由集会にもうちの社員がいるような状態なようです。近年社員もほぼ毎年のように増えているので、必然的に学会への参加人数も増えていることになると思います。いやはや、哺乳類学会でもだいぶ有名になったものです。

ふと、じゃあ他にどういうところの人が参加しているのかと考えてみました。哺乳類の研究をしている研究室の先生や学生は言わずもがな。国立や公立の研究機関の方々。博物館の学芸員さん。アカデミア以外では、うちのような調査を生業とする会社などなど。環境省や農林水産省、地方自治体の行政マンもぼちぼち。こんなところでしょうか。思いつくところで挙げてみましたが、大きなカテゴリとしては「大学・研究機関」「博物館」「行政機関」「調査系会社」といった感じです。なんとなくですが参加者の肩書の偏り方が見えてきます。

ここで、サイエンスコミュニケーションの概念を思い出してみます。サイエンスコミュニケーションは専門家と非専門家をつなぐ概念です。野生動物管理におけるサイエンスコミュニケーションの促進には、様々な専門家と非専門家が参画していく必要があると思いますが、哺乳類学会は少々偏りが大きいように思えます。学会という学問を探求する場所であることは重々承知の上ですが、学生からの目線だと哺乳類学を学んだ先にあるのが「大学・研究機関」「博物館」「行政機関」「調査系会社」しかないように見えます。個人的にはここに「メディア」「教育者」が増えてくると哺乳類学会の面白さが増すだけでなく、サイエンスコミュニケーションも盛り上がってくるのではないかと考えています。もし、これを読んでいる「メディア」「教育者」の方で哺乳類学会の学会員であったことのある方はご連絡をください。一緒に自由集会をやりませんか？

野生動物管理の「知産知承モデル」を実現したい

国立科学博物館に長年勤められていた小川義和さんが提唱した「知産知承モデル」というものがあります。これは地域におけるサイエンスコミュニケーションの一形態として、博物館が地域の知を産み、それを次世代に継承するという考え方で、博物館を対象とした考え方ですが、野生動物管理にも活かせる考え方だと思います。

この「知産知承モデル」は、専門家と非専門家の双方向だけの概念ではありません。さらに地域に根差したという概念が加わります。地域に根差したというものが加わることにより、知識や洞察を生み出すプロセスと創出された知識を次世代や異なるコミュニティに受け継ぐプロセスが追加されます。そこに関わるのは専門家（科学者）と非専門家（一般市民）だけでなく、教育機関や企業、メディアなどの多くの人々が関わることとなります。これからの野生動物管理に必要なのは、専門家と一般の人々の二項対立だけではなく、課題に関係する多様な専門家や地域社会に住む人々

が対話の場を構成し、合意形成や意思決定を進め、地域社会に変革をもたらすことではないかと考えます。そのため、野生動物管理における「知産知承モデル」は、科学的知見を社会に活かしつつ、それを次世代に継承するための有効なアプローチであると考えられます。このモデルを実現することで、地域社会全体が科学的視点に基づいた持続可能な管理に参加できる環境が整うのではないのでしょうか。

科学と社会をつなぐこの取り組みを通じて、人間と野生動物が共存する未来を目指すことが今の社会で重要になってきています。今後はますます重要になってくるでしょう。そのためにも、一緒に野生動物管理、あわよくば学会なんかでサイエンスコミュニケーションを盛り上げてくれる同志をお待ちしております。

参考文献

独立行政法人国立科学博物館編、科学を伝え、社会とつなぐサイエンスコミュニケーションのはじめかた、丸善出版（2017）

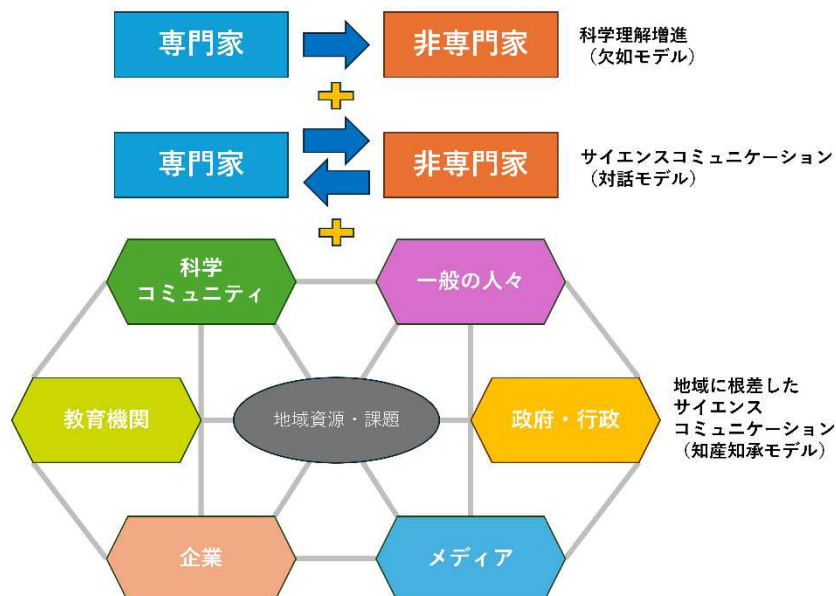


図 これからのサイエンスコミュニケーション

[“The New Role of Museums in Encouraging Continuous Learning in the Contemporary Digital Age” , CIMUSET, 24th ICOM General Conference Milano, Italy 3-9 July 2016 をもとに作成]

ニホンザル研究の聖地を訪ねて—宮城県金華山・長野県上高地編—

浅見 真生 (ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社)

宮城県串間市都井岬で京都大学の今西錦司らがニホンザル(以下、サル)の観察を行い、同じく宮崎県の幸島で1948年にサルの研究を開始してからおよそ75年、日本各地でサルの研究が行われてきました。はじめは餌付けによる群れの接近観察が主流で、幸島と大分県高崎山で社会構造や詳細な行動観察・追跡調査が行われました。高崎山にて若き日の伊谷純一郎が餌付け開始前の野生群を追いかけた記録が、講談社学術文庫の「高崎山のサル」にまとまっています。当時、サルの生態が何もわかっていないなかで、地元の方に聞き取り調査をしたり、山でサルの声を聞いて群れを探したり、野帳と鉛筆、双眼鏡だけで山の中に姿をくらす群れを追いかけます。日々の発見と新鮮な感動とともにサルの生態にせまった観察の日々が綴られており、今も続くサル研究のはじまりの姿を知ることのできる名著です。その後、幸島や高崎山での餌付けの成功にあやかり一般の観光客向けに全国で野猿公苑が開設され、サルを間近に見ることのできる場所が増えていきます。一方、餌付けなしで接近観察が可能になった調査地が、鹿児島県の屋久島(1976年～)と宮崎県の幸島(1982年～)です。ここでは、島内に分布する群れを長期間追跡調査して研究者が群れに追従することに慣れさせ、隣接して生息する数群の全頭個体を識別することで、純野生ザルの調査が可能となりました。こうしたニホンザルを取り巻く研究の歴史は、杉山幸丸の「日本の霊長類学小史:野生ニホンザル研究を中心に」(霊長類研究、2020)に詳細にまとめられています。そして、近年純野生ニホンザルの研究拠点として熱いのが、長野県上高地です。2022年7月24日のNHK「ダーウィンが来た!」にて、サルが生きた魚を捕ま

えて食べる様子が放映されたことをご記憶にある方も多いのではないのでしょうか。

私は学生時代京都大学霊長類研究所に所属しており、学生仲間や先生方から各地のニホンザル研究の情報を聞くたび、いつか全国のサル研究の聖地を巡礼して各地のサルを観察してみたいものだと思っていました(私の研究テーマは哺乳類化石だったので、生きているサル研究の話は異世界でとても興味深かったです)。普段のWMOのお仕事では、里に出てきて被害を出す加害群のサルにばかり接していますが、今年は幸運にも、“サル研究の聖地”金華山と上高地で純野生のニホンザルを観察する機会に恵まれました。今回のFIELD NOTEでは現地の様子をご紹介しますと思います。

<宮城県石巻市金華山>

2024年夏に第40回日本霊長類学会大会が仙台で開催され、ポスター発表を行いました。大会公式のエクスカージョン(学会開催地付近で実施される地域見学のようなもの)として金華山ツアーが実施され、現地の研究者に島内を案内してもらいました。まずは仙台から石巻までバスに揺られて移動し、フェリーに乗って金華山島へ渡ります。島に到着すると港付近に黄金山神社という観光地があり、一般の方も来島されます。こちらの神社は、国内では奈良と金華山でしか行われていない神鹿角切行事があることでも有名です。宿泊施設や飲食店も少数あり快適に滞在することが出来るのですが、港周辺の海際にあった民宿などは東日本大震災の津波で流され、廃業してしまったようです。



写真1：金華山のニホンジカ



写真2：毛づくろいするサル達を観察

金華山に到着して最初に出会う動物が、ニホンジカ（以下、シカ）です。金華山は島嶼部におけるシカの生態などの研究も多く、シカ研究の聖地でもあります。神社ではシカに餌をやることができるので、これらのシカも人に慣れておりのんびりと過ごしています。狩猟も行われていないため、森林内のシカも人を怖がらずゆっくりと観察することができました。

エクサカーション参加者の半分は神社周辺のホテルに宿泊し、もう半分は山中の観察小屋に宿泊しました。私は小屋側に滞在しましたが、こちらは港の周辺の整備された観光エリアと雰囲気が異なり、主に研究者の方しか入らない自然に囲まれた山小屋のような空間でした。

荷ほどきをして案内の方について山に入っていくと、すぐに群れに出会うことができました。50頭程度の群れが頻繁に鳴きながら、林内を移動していきます。林道も何もない急峻な地形を、サルを追いかけながら移動するのはなかなか体力を使います。サルを見逃さないように山の中をゼイゼイ歩いていると、いつの間にか後方にもサルが現れ、群れの中に観察者が取り込まれたようになります。私達と並行して、林内を進むサル達。こちらをチラチラ見ているものの、警戒声をあげたり距離をとったりされることはなく、各々のペースで採食や休憩しながらのんびりと活動しているように見えます。普段は加害個体に威嚇された

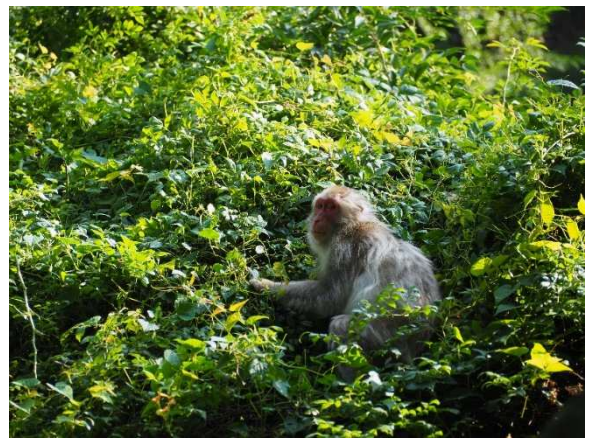


写真3：若葉を食べるサル

り逃げられたりが常の私にとっては、不思議な距離感です。

尾根の上からサルを観察していると、すぐ隣にメスのサルが現れました。私から5mくらいでしょうか、息遣いが聞こえるほどの距離です。静かに観察を続けると、クーコールを始めました。クーコールは群れ内のコンタクトコールで、あるサルが「クー」と鳴くと、仲間のサルが「クー」と返事をする。森で食事をする間、移動する間、サルたちはこの「会話」を繰り返してお互いの位置を確認しつづけています。私の隣で「クー」と鳴いたサルは、唇をちょっと尖らせ口を半開きにして発声していました。クーコールの表情を、肉眼で観察できるなんて、感動です。

観察を終えた帰りがけに、群れと離れた位置でオスサルを見つけました。突然現れた10人以上



写真4：クーコールするメス

の人にとちょっと戸惑っているように見えます。右手に齧り跡のあるキノコを握りしめ、私たちがその場を去るまで佇んでいました。写真5をよく見ていただくと、キノコを持つ右手の指が1本、ピンと伸びていることが分かります。また、右耳の縁も欠けて切れ込みが入っています。バネ指の耳の欠けたオス個体、こうした外貌の情報を蓄積することで個体識別ができるようになり、長期間観察を続けることで、金華山の群れの親子関係や移出入などの生態が明らかにされてきました。こうした純野生のサルを間近で観察できる拠点は珍しく、数えるほどしかありません。しかし、こうした研究の聖地金華山でも、近年はコロナや震災の影響もあり入山する研究者の数が減り、長年続いてきた個体識別や群れの調査の継続が危ぶまれて



写真5：食べかけのキノコを持つオス

いるようです。ニホンザルに限らず、野生動物の野外調査地の継続問題はどこも頭を悩ませられる問題のようで、日本の野生動物を研究する学生さんが増えたらいいのになと思っています。

<長野県松本市上高地>

2024年冬、上高地で研究をしている信州大学の学生さんに引率してもらい、厳冬期の上高地へと参りました。厳冬期の最低気温が -25°C にも達する上高地に生息するニホンザルは、非ヒト霊長類で世界最寒地に生息するサルの一つです。標高が高く山の裾にある地形のため、ニホンザルの分布の北限である下北よりも最低気温は低くなるようです。上高地はマイカーの利用が通年禁止されており、冬期はバスやタクシーも入らないため調査地へのアクセスが大変です。今回は、許可を得た大学の車で入らせてもらいました。

上高地の道路を車で走っていると、群れが道の近くに現れました。上高地の群れは、梓川周辺など低標高のエリアを好んで利用しているようで、冬期は特にその傾向が強いようです。車から降りて、休業しているホテルの裏からサルに近づくと、金華山同様こちらのサルも人を気にせず採食や毛づくろいを続けていました。

印象的だったのは、ササや樹皮など採食の時間が長く、食べているサルのお腹がポンポコリンに膨らんでいることです。毛並みの良い密な冬毛で

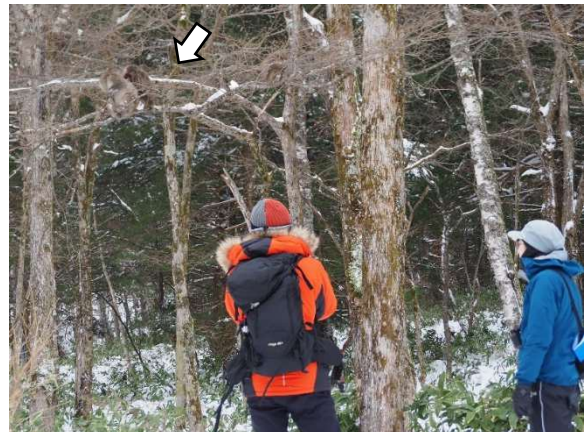


写真6：樹上で毛づくろいするサル達を観察

フカフカしていることを差し引いても、お腹周りの太さが他地域のサルより2周りくらい太い印象でした。上高地の植生ではサルの餌となる液果類が相対的に少なく、繊維質の多い葉や植物を食べ



写真7：ササの葉を食べるサル



写真8：ササの葉の食痕



写真9：樹皮を食べるメス。
発信機首輪を装着している

る割合が多いことで腸内細菌叢が異なっており、さらに冬に備えて脂肪も蓄えることで体格が良くなり、お腹周りも太くなっているようです。

サルが食べたあとのササの葉は、葉の一部が口のサイズに食いちぎられており、虫食い状に歯の縁がボコボコしています。また、上高地はニホンジカの生息密度がとても低いため、林内のササの葉の食痕のほとんどはサルであると考えられます。食痕の残る葉は多く、道路沿いの低標高地でササをよく食べている様子がうかがえました。

上高地でのサル研究は、信州大学に霊長類を研究する松本卓也先生が着任したことや魚食の観察事例もあり、近年盛り上がってきています。発信機を付けた群れの追跡や、個体識別が進んでいるようで、上高地で生息する複数の群れの構成や行動圏が明らかになってきているとのことでした。厳しい環境で生きる純野生群の研究が上高地でも花開き、長く続く調査地になることを期待しています。

今回引率いただいた信州大学の学生さんを含め、上段で紹介した金華山の観察ツアーには学生さんが複数参加していました。学部生や修士・博士の学生さんと野生動物の観察をできたことはとても良い経験でした。何もかもが新鮮な驚きに満ちている学生さん達を見ていると、頭でっかちになって知識ばかりが頭に入っている自分の頭の固さに気づかされます。全ての基礎である、「よく観察して考える」という初心を忘れず、動物に向き合っていきたいと思われました。

参考文献

杉山幸丸 2020:日本の霊長類学小史：野生ニホンザル研究を中心に. 霊長類研究.

伊谷純一郎 1977: 高崎山のサル. 講談社

学会参加報告

赤松 萌鈴（ワイルドライフマネジメント事業部 広島事業所）

ワイルドライフマネジメント事業部広島事業所の赤松です。今回、私は日本哺乳類学会神戸大会に3日間参加させていただきました。業務の都合上初日は参加できなかったのですが、様々な発表を聞くことができ大変勉強になりました。

今大会において、個人的に興味深かった発表を紹介させていただきます。

自由集会 F12 では「哺乳類の行動生態学：ニホンジカ」というタイトルで、3人の演者の方が採食行動・空間分布の決定機構・対捕食者行動・配偶戦略など、様々な切り口からのニホンジカの行動生態に関する研究例を発表されていました。その中で東京農工大学の高田隼人先生による「空間分布の決定機構：なぜシカは過酷な高山帯へ向かうのか？」についての発表をご紹介します。

この研究は、富士山麓において糞塊調査を実施することで、ニホンジカの空間分布と人間による捕獲圧との関係性を検討したものです。調査地に含まれる富士山の高山帯は火山性荒原でありニホンジカにとっての餌資源が著しく乏しい環境ですが、2010年代からニホンジカの出現が確認されています。

調査手法としては、富士山麓の広域で60地点（計約30km）の糞塊調査を行い、さらに植物の現存量・最寄りの人間居住地までの距離・管理捕獲の実施の有無を調査地点ごとに記録しています。

研究結果としては、ニホンジカの空間分布は非捕獲地域・人間の居住地から遠い場所に偏って分布していることが明らかになりました。餌資源となる植物は中標高帯で資源量が多いことが明らかになりましたが、富士山麓では非積雪期に巻き狩りによる管理捕獲を中標高帯で行っていることから「恐れ of 景観 (Land Scape of Fear)」が作り出され、その結果、

低標高帯の人間活動に加え管理捕獲の影響が、ニホンジカの空間分布を高山帯の高標高域にシフトさせているとまとめられていました。

この発表を受けての感想としましては、本研究ではある程度の捕獲圧により空間分布を変化させることが可能であることが示唆されましたが、具体的にどの程度の捕獲圧なのかや狩猟方法の違いによる効果の差などは未実証の部分であり、さらに発表者の方も言及していましたが、山の中腹での捕獲と近年増加している市街地付近への出没が関連している可能性も否定できないため、実際の管理に運用するうえでの難しさはあったと感じました。また今後、発表者の方は近年市街地出没が急増している同調査地において、もともと同一個体群であったと考えられるにもかかわらず、高標高帯域と市街地にそれぞれ分布を変化させた個体について、それぞれの環境での行動形質の違いに着目した研究や捕獲圧が高い場所に生息する個体の形質についての研究を直接観察などを用いた行動生態学の観点から進めていくとのことだったので、今後の発表を楽しみにしたいです。

社会人として初めて学会に参加させていただき、これまで自身の研究テーマに関する発表（ニホンジカ・積雪地）を聞いていましたが、今回は他獣種に関する発表やマネジメントにかかわる法律・制度についての集会にも意識的に聞きに行ったことで、たくさんの情報収集ができ改めて自身の課題についても認識することができました。また、懇親会などで紹介していただくなど、これまで築いた交流関係から少しではありましたが人のつながりを広げることができたのではないかと思います。今後もぜひ学会に参加していきたいと思います。

哺乳類学会参加報告

井上 莉央南（ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社）

ワイルドライフマネジメント事業部 関西支社所属の井上です。今回、私は9月6日から9月9日までの4日間で開催された哺乳類学会 2024 年度大会に参加させていただいたので、ご報告いたします。

今回は関西支社のある神戸での開催ということで、社内からも多くの方が参加していました。私は昨年の沖縄大会に続き2回目の参加でしたが、学生だった昨年とは気になる発表や感じたことが大きく変わった気がします。学生時代はリス・ネズミを対象に生息地分断化の影響について研究していたため、「保全」をテーマにした発表を中心に聞いていましたが、今年は業務で関わることの多いクマ・シカを中心に「管理」がテーマの発表を多く聞きました。その中でも、特に印象に残った発表をご紹介します。

大会前日にプログラムを見ながらどの発表を聞きに行こうかと考えていた時、これは絶対聞きたい！と思った発表の一つが中本敦さんの口頭発表「ニホンジカ駆除は *Apodemus* 属2種のネズミ個体群を回復させる？」でした。中本さんは、昨年度にも対馬におけるシカの個体数急増が小型哺乳類の個体数に致命的なダメージを与えていることについて発表されており、今回はその後の研究結果も含めた発表でした。

近年全国的にニホンジカの個体数が増加し、過剰な採食圧による生態系への影響が深刻化しています。長崎県対馬も例外ではなく、2000 年前後からシカの個体数増加が目立つようになり、島内全域で下層植生の急激な衰退が生じているそうです。WMO には以前対馬でツシマヤマネコの保全活動に従事されていた方（箕浦さん）がいるため、対

馬のシカ問題については何となく知っていましたが、具体的にどのような影響が出ているのか、どれくらい深刻なのかはあまり把握していませんでした。シカの採食圧による下層植生の衰退が野ネズミの個体数に影響を与えることは以前から知られています。アカネズミ・ヒメネズミは野ネズミの中でも絶滅可能性が低いとされている種なのでその存続が危ぶまれる事例は少ないですが、生態系の中では中型哺乳類の重要な餌資源となっています。対馬では絶滅危惧種であるツシマヤマネコの餌資源であるため、シカが与える小動物への影響を把握するための調査が急務となりました（ちなみに箕浦さんは、もし魔法が使えるとしたら対馬のシカを全て超ミニサイズにしたいらしいです）。

対馬では島内の森林にシカ防護柵を設置しています。本研究では2021年から2024年にかけてその柵の内外にシャーマントラップを仕掛け、アカネズミ・ヒメネズミの捕獲調査を行いました。2021~2022年の調査では、防鹿柵内では少数のネズミが維持されていたものの、柵外ではネズミの生息がほとんど見られなかったそうです。しかし、島内でのシカの駆除を進めた結果、2023年以降では柵外でもネズミが捕獲されるようになり、個体数の回復が確認されました。以上の結果から、ネズミ類の個体数はシカの駆除の進行に伴って速やかに回復することが明らかになり、このことはツシマヤマネコの保全にも繋がると中本さんは発表を締めくくっておられました。

この研究の大きな目的はツシマヤマネコの「保全」でしたが、そのためには増えすぎているニホンジカの「管理」が必要であることがわかりました。WMO では「管理」の業務が多く、動物が好

きであるが故に心苦しい経験をすることもあります。しかし、生態系において最も大切なのはバランスであり、豊かな生態系を守っていくためには「保全」と「管理」の両方を並行して行っていくことが重要であることを改めて感じました。

最後に、今回の学会で普段扱わない種から最新研究まで幅広い発表を聞くことができ、大変刺激を受けました。参加させていただきありがとうございました。野生動物の保護管理を通じて社会の役に立てるよう、これからも邁進していきます。

学会参加報告 野生生物と社会学会 ―公共政策学としての野生生物管理学―

島田 駿（ワイルドライフマネジメント事業部 関東支社）

島田からは、12月の野生生物と社会学会で行われたテーマセッション「TS-02 公共政策学としての野生動物管理学」と「TS-04 鳥獣政策に関する各種計画や政策の課題と展望」についてご紹介します。

① (TS-02) 公共政策学には「In」「of」の二つの知識がある。それぞれ政策決定に必要な知識「研究者」、決定と設計に関わる知識「行政」となっており動物の管理計画策定で「研究者」が「行政」に対し提案したことが政策の場で「投入・利用」されず無力感を感じてしまう場合が多い。これは「In」「of」で活用できる知識領域が違うためにおこる。研究者に対し、ofの知識が存在していることを周知し議論を深めていく必要がある。という問題に対し個体数管理の政策から見えていくと、

- ・「In」の知識及び技術も不足している
- ・研究者と行政で情報にギャップがある
- ・法律やナワバリの関係で非合理対策がてんこ盛りになる

そのため、「of」の知識や情報について関係者間で共有していく必要がある。というものでした。

② (TS-04) では、特定計画について、課題と対策を項目ごとに述べられていました。

その中で計画の実行体制については縦割り行政

や不仲（例：農水と環境部署）、人材不足、市町村への普及という課題に対し

- ・対策室などの連携部署を作る
- ・行政、専門家を構成員とした会議を開催、実行部隊をつくる

という対策が提案されていました。個人的にはこの課題が今後行政側で大きな課題になってくるのかなと思いました。連携部署については農水と環境でできること動ける範囲が違うということを解決できますし、関係者を構成員とした会議では①ででた法律やナワバリの関係で非合理対策がてんこ盛りになることを避けることができ対策実行をスムーズに進めるための提案として参考になりました。

①、②から今後動物の被害対策に関わった際は情報共有、連携がとりやすい場を増やすことが重要であると考えられました。

野生生物と社会学会は実働的な発表、特に被害対策関係の発表は共感・理解できるものが多く動物との軋轢軽減を考えている人には是非参加してほしいと思える学会で有意義な時間となりました。今回得た情報を WMO の業務にどう関わらせていくのか日々考えながらこれからも精進していきたいと思います。

新人紹介

◇ ◇ 松山 みのり ◇ ◇

はじめまして。

2024年9月に管理本部情報管理室に配属となりました松山みのりと申します。

生まれは静岡県浜松市天竜区(前天竜市)、徳川家康の長男・松平信康が城主をしていた地区のひとつ山奥です。HONDAの創始者・本田宗一郎の出身小学校で「試す人になれ」という校訓を真に受け中学受験に挑戦、「フジヤマのトビウオ」で知られる戦後の日本水泳界を牽引した古橋廣之進の出身校に進学し中高6年間を過ごしました。リニア安倍川問題で日本を賑わせた川勝知事が当初学長をしていた静岡文化芸術大学で美術・芸術・工芸・3DCG・映像制作・プログラミング・伝統芸能……等学ぶ中で自身の才能の無さに絶望し、警察官を志して上京します(?)。カードゲームの営業から業界1位の警備会社でラグビーや箱根駅伝の警備をしたり、フェムテックベンチャーやCM会社で営業をして身体を壊したり、WEBディレクターとしてHPを売ったりと職を転々とし、ご縁がありWMOに拾っていただいて今に至ります。

WMOにエントリーした理由は、2年前に地

元浜松でツキノワグマを目撃したことがきっかけです。浜松市天竜区は、上述の松平信康にまつわるお祭り「信康祭り」が毎年11月に開かれ、うりぼうが展示されたりイノシシ鍋が振舞われたりと、イノシシは昔から身近な地域ですがツキノワグマの目撃情報はほぼ無い地域でした。ですが2023年秋、地元の川で遊んでいた時、約200m先にツキノワグマを視認。衝撃を受けました。友人とサイレントダッシュで車に乗り込み、「昔こんな市街地近くにクマなんか出なかったよね……？」と戦慄。この経験を経て野生動物と人間社会について強く意識するようになりました。約半年後、GAFAと不確かなAI記事に依存しきっているHP業界に辟易し、もっと社会貢献性の高い仕事がしたい！そして私も成長したい……と転職活動を開始しWMOを見つけ、あの時の衝撃が蘇りました。「あの時のツキノワグマってWMOの使者だったのかも……！」と。

前置きが長くなりましたが、割となんでもやってきましたのでなんでもお任せください。WMOの理念や所属されている社員一人ひとり



茨城県ダチョウ王国でダチョウと会話を試みる松山

のレベルの高さ、そしてフィールド調査から提案、啓発活動まで一貫して提供できる組織力にメロメロです。情報管理室から WMO の価値を

さらに高めたり、企業としての守備力を高めたり、皆様がもっと快適に業務ができるように尽力いたしますので何卒よろしくお願い致します。

◇ ◇ 中嶋 英輝 ◇ ◇

皆様、初めまして。2024 年 11 月より広島事業所に配属になりました中嶋英輝（なかしま ひでき）と申します。人生、寄り道回り道とふらふらと歩み 40 歳に差し掛かるタイミングでの今回のご縁を戴けた事に、まずは深く感謝いたします。好きな歴史人物はヘンリー 8 世、郭子儀、工藤俊作。座右の銘は「守株待兎」「どーでもいっか」。

私は福岡県の辺境、豊前市で生まれ川や山で遊び育ちました。小学生の頃は砂漠化など環境問題が注目され始めた時期で、将来は環境問題に関わる仕事をしたいと夢見ました。しかし、思い描くように人生は進むはず何か沼にハマったように停滞、もがいていました。

転機が訪れたのは 27 歳の時。考え方も変わり、現状がどーでもよくなったので荷物をまとめバイクで小笠原諸島父島に向かいました。フェリーから眺める大海原、小笠原の鮮やかで強烈な自然の色はとても衝撃で今でも鮮明に記憶しています。島では小笠原海洋センターでボランティアとしてウミガメの調査に携わり砂地の穴掘り作業をひたすら素手で行い、産卵数、孵化率等を記録。中にはネズミやカニの食害にあい悪臭まみれの卵もあり、数日匂いが取れない事もありました。無人島のウミガメ調査ではテント泊で数日調査した事や、波にのまれて死にそうな思いをしたのも楽しい記憶です。

その後、父島の会社に就職後すぐにグリーンアノール捕獲事業が始まり環境省、自然研の指導の下で捕獲業務に携わり、大変学びの多い場となりました。

この頃、慰霊事業で硫黄島へ行く機会があり参加。褐色の浜辺に朽ちたコンクリート船が鎮座する光景は激戦を彷彿させ心苦しくなる光景でした。硫黄島という戦中屈指の激戦地に上陸慰霊できたことは誠に貴重な経験でした。

また、インドネシアでのウミガメ調査にも参加。木製の小船で出航（かなり遅い）、長時間の船酔いに苦しみ小島（亀ハウスくらい）の小屋に一泊し翌日、目的の島に上陸。この島は灯台と灯台守の家族が住む小さな島で一周するのに一時間もかからない広さでした。調査するも大量のペットボトルやゴミが打ち上げられ、ネズミの食害や盗掘もあり卵は見つからず調査終了。帰りに船が故障し、救助に来た船も故障。さらに救助に来た船で三連結して走行、絶望的な速度で帰路に着いたのも懐かしい思い出です。

その後、沖縄県国頭村でマングース捕獲事業を行う会社に就職し探知犬のハンドラー候補生として捕獲作業と指導訓練を受け、1年半過ごしましたが、自身のハンドラーとしての適性に限界を感じ断念。（関係者に多大な迷惑をおかけした事を猛省しております）

地元に戻り障害者福祉の仕事しながら狩猟も細々としておりました。そんな折に、WMO の求人を見「社会問題に貢献したい」「また自然に関わる仕事がしたい」この 2 点の想いと WMO の会社理念に共感し「これだ！！」と想い急ぎ応募し、前職を 10 月で退職、10 月末に広島に引っ越し今に至る次第です。

私は専門的な経歴や知識を有しておりません

ので、まず基礎的な知識、技術を学び、WMOの一員として責任と自覚を持って業務に励む人材になる所存です。

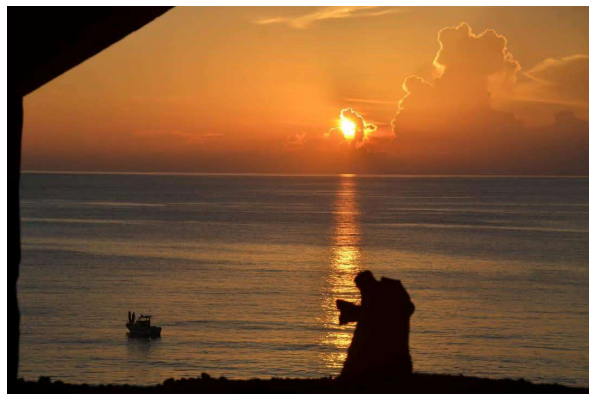
未熟者ですが皆様のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

追伸：以前、インドネシア人の知人宅で霊力

者？に指で軽く押す施術で激痛に襲われる自分の理解を超えた経験をしました。激痛で叫びのたうつ私を横目に、唾を吐きながら施術。施術後「お前は、山に入るな。山の悪いのがお前に入る。だから女にフラれるんだ」と言われました。……山に入る事も多いので、どなたか良いアドバイスください。



友人たちと父島、中山峠に行った際の写真



戦中の砲台跡からの夕陽

WMO活動報告 2024年10月～12月

- 林業関係者等によるシカ被害対策等伴走支援実施事業〔林野庁〕
- 錯誤捕獲個体放獣処理単価契約〔東京神奈川森林管理署〕
- 箕面国有林におけるシカの生息状況外モニタリング調査委託事業〔近畿中国森林管理局〕
- クマ類の出没に対応する体制構築及びクマ緊急出没対応業務〔環境省〕
- ニホンジカ及びイノシシの個体数推定等業務〔環境省〕
- ゼニガタアザラン保護管理に係る会議運営支援等業務〔北海道地方環境事務所〕
- 東北カワウ広域協議会企画運営及び広域保護管理指針検討等業務〔東北地方環境事務所〕
- 東北地方におけるニホンジカ対策研修会企画運營業務〔東北地方環境事務所〕
- 尾瀬及び日光国立公園におけるニホンジカ捕獲調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 尾瀬及び日光国立公園ニホンジカ対策広域協議会運營業務〔関東地方環境事務所〕
- 富士箱根伊豆国立公園箱根地域駒ヶ岳モデル地区内における REST 法を用いたシカの生息密度推定調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 関東山地ニホンジカ広域保護管理調査等業務〔関東地方環境事務所〕
- 富士箱根伊豆国立公園箱根地域ニホンジカ対策に係る近隣地域の捕獲状況把握調査業務〔関東地方環境事務所〕
- 国指定紀伊長島鳥獣保護区カワウ生息状況等調査業務〔中部地方環境事務所〕

- 国指定紀伊長島鳥獣保護区ドブネズミ対策手法検討業務〔中部地方環境事務所〕
- 四国のツキノワグマ錯誤捕獲等緊急対応業務（単価契約）〔中国四国地方環境事務所〕
- グリーンワーカー事業（四国におけるツキノワグマ出没対応ガイドライン更新等業務）
〔中国四国地方環境事務所〕
- 笹ヶ峰自然環境保全地域におけるニホンジカ対策検討業務〔中国四国地方環境事務所〕
- ツキノワグマ市街地出没時対応訓練実施マニュアル作成業務〔岩手県〕
- 避難地域鳥獣対策支援業務〔福島県〕
- 特定復興再生拠点解除区域におけるニホンザル広域対策事業〔福島県〕
- 生活環境保全のための鳥獣被害対策に係る研修事業業務委託〔福島県〕
- 鳥獣被害対策に係る生活環境被害防止モデル事業〔福島県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定業務〔茨城県〕
- 茨城県アライグマ生息状況調査業務〔茨城県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業業務委託（鬼怒沼）〔栃木県〕
- 先進技術を活用したシカ生息状況調査等実施事業業務委託〔栃木県〕
- 福島茨城栃木県境地域ニホンジカ捕獲業務委託〔福島茨城栃木連携捕獲協議会〕
- 神津地区ニホンジカ及びイノシシ生息状況等調査業務〔群馬県〕
- 赤城山ニホンジカ及びイノシシ生息状況等調査業務〔群馬県〕
- 群馬県ニホンジカ生息状況調査〔群馬県〕
- イノシシ・ニホンジカ生息状況調査及び個体数推定業務〔埼玉県〕
- 外来種特別対策事業（アカゲザル等）委託〔千葉県〕
- ニホンザル生息状況調査等業務委託〔千葉県〕
- 大島キョン防除委託 組織銃器C〔東京都〕
- シカ個体群動態等調査委託〔東京都〕
- 中型野生獣に対する農作物被害対策状況調査委託〔東京都〕
- ツキノワグマ学習放獣等業務委託〔神奈川県〕
- ツキノワグマモニタリング調査等業務委託〔神奈川県〕
- ニホンザル生息状況調査業務委託〔神奈川県〕
- ニホンジカ生息状況調査業務委託〔神奈川県自然環境保全センター〕
- 公園整備工事 県単（その814） 公園緑地等維持管理工事 県単（その801）合併
〔神奈川県厚木土木事務所〕
- 新潟県ニホンザル生息状況調査業務委託〔新潟県〕
- 新潟県ツキノワグマ生息状況調査業務〔新潟県〕
- クマ緊急出没対応事業（効果検証）〔新潟県環境局〕
- 石川県ニホンジカモニタリング調査〔石川県〕
- 福井県ニホンジカ管理計画モニタリング業務〔福井県〕
- 福井県クマ目撃効率調査業務〔福井県〕
- 福井県クマ有害捕獲伴走支援業務〔福井県〕
- ニホンジカ及びイノシシ生息等モニタリング調査業務〔山梨県〕

- 山梨県中央線沿線ニホンジカ動態調査業務（大月エリア）〔山梨県〕
- ニホンジカ生息状況等調査業務委託〔山梨県森林総合研究所〕
- ツキノワグマ緊急対策業務〔長野県〕
- GPS ロガー装着によるカワウ飛来動向調査委託業務〔岐阜県〕
- 岐阜県ツキノワグマ食性分析調査業務委託〔岐阜県〕
- 岐阜県ツキノワグマ情報解析業務委託〔岐阜県〕
- アーバンベアモニタリング調査業務委託〔岐阜県環境生活部〕
- ツキノワグマ生息実態調査業務委託〔静岡県〕
- ツキノワグマ生息環境調査業務〔静岡県〕
- ツキノワグマ図上演習実施業務委託〔愛知県〕
- ツキノワグマ保護等業務委託（単価契約）〔三重県〕
- 三重県ニホンザル生息状況調査業務委託〔三重県〕
- ツキノワグマ移動放獣業務〔滋賀県〕
- 森林動物行動圏等調査事業業務〔滋賀県〕
- 第一種特定鳥獣保護計画モニタリング調査事業（ツキノワグマ）〔滋賀県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業（効果的捕獲促進事業）捕獲調査業務（伊吹山）〔滋賀県〕
- ツキノワグマ保護管理事業〔京都府〕
- 年度別事業実施計画（ツキノワグマ）再検討業務〔京都府〕
- ニホンザル GPS 首輪等装着業務〔京都府中丹広域振興局〕
- カワウ管理協議会の運営事務補助等業務〔兵庫県〕
- カワウ管理手法実証業務〔兵庫県〕
- ツキノワグマ放獣業務委託〔兵庫県森林動物研究センター〕
- シカ捕獲・GPS 装着業務〔兵庫県森林動物研究センター〕
- ツキノワグマ学習放獣業務委託〔奈良県食農部〕
- ツキノワグマ出没時対応業務委託〔奈良県食農部〕
- 奈良県ニホンザル生息状況調査業務〔奈良県〕
- 紀伊山地カモシカ保護地域第6回特別調査委託業務〔奈良県〕
- ツキノワグマ GPS 行動追跡調査業務委託〔奈良県〕
- 和歌山県ツキノワグマ保護管理対策業務〔和歌山県〕
- 有害ニホンザルの群れ捕獲業務〔和歌山県〕
- ニホンザルの生息状況調査（GPS を活用した群れ調査）業務〔和歌山県〕
- 和歌山県ツキノワグマ生息数推計業務〔和歌山県〕
- クリハラリス防除計画策定事業委託業務〔和歌山県〕
- ツキノワグマ放獣業務〔鳥取県〕
- 特定鳥獣生息実態調査業務〔鳥取県〕
- 指定管理鳥獣（ツキノワグマ）放獣業務〔鳥取県〕
- 指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定調査業務〔鳥取県〕
- カワウ捕獲・被害抑制対策業務〔鳥取県鳥獣対策センター〕

- 島根県ニホンザル生息状況調査に関する業務〔島根県〕
- 島根県ニホンジカ個体群動態の推定に関する業務〔島根県〕
- シカ生息状況調査事業〔島根県〕
- 野生鳥獣調査事業（ニホンジカ、イノシシの生息数推定業務）〔岡山県〕
- 野生鳥獣調査事業（サル生息状況調査（個体数調査業務））〔岡山県〕
- 岡山県カワウ被害防止総合対策事業〔岡山県〕
- 堅果類等豊凶調査業務〔広島県〕
- 広島県ニホンジカ林業被害実態等調査分析業務〔広島県〕
- 特定鳥獣等生息状況モニタリング調査・分析等業務〔広島県〕
- ニホンジカ個体数推定業務及び生息状況調査〔山口県〕
- 鳥獣被害対策アドバイザー支援業務〔山口県〕
- わな免許取得者へ向けた捕獲・処理技術の向上研修業務〔山口県〕
- ツキノワグマ対応人材育成研修〔山口県〕
- ニホンザル対策強化事業〔徳島県〕
- ニホンジカ生息状況モニタリング調査解析及び広域捕獲実施業務〔徳島県〕
- ニホンジカ生息状況モニタリング調査業務〔徳島県〕
- 徳島県指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画策定等支援業務〔徳島県〕
- シカによる森林被害緊急対策事業委託業務〔愛媛県〕
- 指定管理鳥獣（ニホンジカ）捕獲等業務〔石鎚山系〕〔愛媛県〕
- 愛媛県ニホンザル生息状況等調査業務〔愛媛県〕
- サル被害総合対策普及事業委託業務〔高知県〕
- 福岡県指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画基礎調査及び評価業務〔福岡県〕
- かんしょ産地サル被害対策実証事業 ニホンザル生息状況調査委託業務〔大分県中部振興局〕
- ニホンザル発信機装着業務委託〔東京都八王子市〕
- サル個体数調査業務委託〔東京都檜原村〕
- 警戒システム GPS 発信器装着業務委託〔東京都奥多摩町〕
- ツキノワグマ緊急対策事業に関する委託（錯誤捕獲対応）〔東京都奥多摩町〕
- タイワンザル生態調査および計画策定委託〔東京都大島町〕
- クリハラリス生態調査および計画策定委託〔東京都大島町〕
- 大島町タイワンザル囲いわな設置工事〔東京都大島町〕
- 静岡県ニホンザル行動圏把握調査業務〔静岡県静岡市〕
- 伊勢市ニホンザル生息状況調査業務委託〔三重県伊勢市〕
- ツキノワグマ保護等業務委託〔三重県尾鷲市〕
- ツキノワグマ不働化業務委託〔三重県熊野市〕
- ツキノワグマ保護等業務委託〔三重県紀北町〕
- ニホンザル甲賀B群個体数調整業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル有害捕獲業務委託〔滋賀県甲賀市〕
- ニホンザル甲賀A群個体数調整業務委託〔滋賀県甲賀市〕

- ニホンザル個体数調整業務委託（安曇川B群）〔滋賀県高島市〕
- ニホンザル個体数調整業務〔滋賀県東近江市〕
- 愛荘町ニホンザル個体数調整業務委託（甲良B群）〔滋賀県愛荘町〕
- 甲良町ニホンザル個体数調整推進事業委託（個体数調整）〔滋賀県甲良町〕
- ニホンザル個体数調整業務委託（多賀C1群）〔滋賀県多賀町〕
- 総合獣害対策事業ニホンザル（京都A群）捕獲等管理業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業久多ニホンザル（京都D群）捕獲等管理業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業ニホンザル（亀岡A群）管理業務〔京都府京都市〕
- 総合獣害対策事業 東山地域イノシシ等大型獣対策業務〔京都府京都市〕
- ニホンザル GPS 発信機装着業務〔京都府京丹後市〕
- ツキノワグマ有害捕獲個体処理委託業務〔鳥取県八頭町〕
- 天然記念物臥牛山のサル生息地 天然記念物食害対策事業 ニホンザル発信機装着業務
〔高梁市教育委員会〕
- サル被害総合対策モデル事業〔岡山県真庭市〕
- ニホンザル捕獲業務〔岡山県真庭市〕
- イノシシ市街地出没対策に係る生息状況等調査業務〔広島県福山市〕
- ニホンザル捕獲檻（竹森鐵工製）撤去業務委託〔広島県廿日市市〕
- ニホンザル等被害対策研修業務委託（嘉川地域）〔山口県山口市〕
- ニホンザル被害防止対策研修業務〔徳島県海陽町〕
- 市街地におけるハナレザル被害対策業務委託〔福岡県那珂川市〕
- 有害鳥獣捕獲処理業務委託〔福岡県那珂川市〕
- ニホンザル効果的捕獲促進事業業務委託〔川俣町農林産物有害鳥獣対策協議会〕
- 鳥獣被害防止総合対策交付金 ニホンザル生息状況等調査業務〔南房総市有害鳥獣対策協議会〕
- 静岡市ニホンザル生息状況調査（カウント調査）業務〔静岡市野生動物被害対策研究協議会〕
- 鳥獣害のない里づくり推進事業ニホンザルモニタリング調査業務〔大野市鳥獣害対策協議会〕
- 鯖江市ニホンザル捕獲業務〔鯖江市鳥獣害対策協議会〕
- ニホンザルモニタリング・有害捕獲業務委託〔池田町総合農政推進協議会〕
- 越前町ニホンザル対策業務〔越前町鳥獣害対策協議会〕
- 野生いのしし経ロククチン野外散布に係る総括業務委託〔岐阜県経ロククチン対策協議会〕
- GPS 首輪装着事業委託業務〔大垣市鳥獣被害防止対策協議会〕
- サル対策研修会講師派遣業務〔関市鳥獣害防止対策協議会〕
- ニホンザル生息状況調査等業務〔揖斐川町鳥獣被害対策協議会〕
- ニホンザルテレメトリー調査業務〔豊川市鳥獣被害防止対策協議会〕
- ニホンザル個体数・行動域調査業務〔滋賀県西部・南部地域鳥獣被害対策協議会〕
- 竹生島植生被害モニタリング調査業務〔竹生島タブノキ林の保全・再生事業推進協議会〕
- ニホンザル群れ移動追跡用発信機装着業務委託〔湖東地域広域鳥獣被害防止対策検討会議〕
- 鳥獣被害防止総合対策交付金事業 大丹波地域ニホンザル篠山B群（園部A群）発信器装着業務
〔大丹波地域サル対策広域協議会〕

- 箕面山ニホンザル行動圏把握用 GPS データ解析業務委託 [箕面市教育委員会]
- 川本町鳥獣被害防止総合支援事業 被害防除業務 [川本町有害鳥獣被害対策協議会]
- ニホンザル捕獲業務 [福山市鳥獣被害対策協議会]
- つるぎ町ニホンザル等捕獲駆除業務 [つるぎ町有害鳥獣捕獲対策協議会]
- 山江村鳥獣被害防止対策協議会有害鳥獣複合対策業務委託 [山江村鳥獣被害防止対策協議会]
- 自動撮影カメラ・熱赤外搭載ドローンによるシカ生息密度推定業務 [京都先端科学大学]
- ニホンザル有害捕獲業務 [一般社団法人越前市獣害防止対策ネットワーク]
- 第2期野生イノシシ経口ワクチン野外散布実施業務委託 [一般社団法人神奈川県畜産会]
- 不具合 GPS 首輪の回収と首輪装着業務 [株式会社サーキットデザイン]
- ツキノワグマ放獣業務 [特定非営利活動法人四国自然史科学研究センター]
- 加美町ツキノワグマ捕獲追跡調査業務 [一般財団法人日本気象協会]
- 長野県ニホンザル対策支援補助業務 [一般社団法人ニホンザル管理協会]
- 「子はかすがい」 仮説：ベニガオザルのアカンボウが寛容的社会で担う役割の解明
[公益財団法人日本モンキーセンター]
- 地域リーダー（森林）及び鳥獣被害対策コーディネーター育成研修事業における教材改訂及び
研修会開催・講師等（委託） [株式会社野生鳥獣対策連携センター]
- ニホンザル2群に対する集団捕獲業務 [Wildlife Service]
- イノシシ広域被害対策事業に係るモニタリング調査等業務 [ワイルドライフ・サポート HARU]
- 動物の安楽死を考える「野生動物管理のための安楽死」（日本学術会議/日本法獣医学会）
..... 講演：岸本(真)
- クマの生態を知り、被害に遭わないための研修会（三重県） 講師：中川
- 鳥獣対策研修会（岐阜県美濃加茂市） 講師：海老原
- ツキノワグマ対策研修会（愛知県） 講師：野瀬
- カワウ保護及び管理に関する検討会（環境省） 検討委員：加藤(洋)
- ニホンジカの保護及び管理に関する検討会（環境省） 検討委員：濱崎
- 屋久島世界遺産地域科学委員会ヤクシカ・ワーキンググループ 委員：濱崎
- 鳥獣被害対策データ活用促進検討会（農林水産省） 委員：清野
- 福島県野生鳥獣保護管理検討会 委員：濱崎
- 東京都シカ管理計画検討会 委員：岸本(真)
- 神奈川県ニホンザル管理検討委員会 オブザーバー：岡野・海老原・豊川
- 山梨県イノシシ・ツキノワグマ保護管理会議 オブザーバー：奥村
- 静岡県カモシカ管理検討会 委員：濱崎
- 静岡県ニホンジカ保護管理検討会 委員：濱崎
- 静岡県カワウ食害防止対策検討会 委員：加藤(洋)
- 滋賀県ニホンザル第二種特定鳥獣管理計画検討会 アドバイザー：濱崎
- 滋賀県ニホンジカ第二種特定鳥獣管理計画検討会 アドバイザー：濱崎
- 滋賀県イノシシ第二種特定鳥獣管理計画検討会 アドバイザー：濱崎
- 兵庫県野生動物保護管理運営協議会 委員：岸本(真)

- 奈良保護管理計画検討委員会 鹿苑の等検討部会 奈良のシカ獣医学ワーキンググループ
.....委員：岸本(真)
- 福岡県特定鳥獣（イノシシ・シカ）保護管理検討会.....委員：横山
- 日本哺乳類学会 哺乳類保護管理専門委員会.....委員：岸本(真)
- 日本哺乳類学会 外来動物対策作業部会.....委員：白井・佐伯・渡邊
- 日本哺乳類学会 ニホンザル保護管理検討作業部会.....委員：清野・海老原・三木・藏元
- 日本哺乳類学会 シカ保護管理検討作業部会
.....副部会長：横山、委員：濱崎・岸本(真)・岸本(康)・大西
- 日本哺乳類学会 クマ保護管理検討作業部会.....副部会長：中川(恒)
- 日本哺乳類学会 イノシシ保護管理検討作業部会.....部会長：岸本(真)
- 日本哺乳類学会 カモシカ保護管理検討作業部会.....委員：西村・関
- 日本霊長類学会 霊長類保全福祉委員会.....幹事：白井
- 日本野生動物医学会.....顧問：岸本(真)、評議員：後藤
- 日本野生動物医学会専門医協会.....会長：岸本(真)
- 日本野生動物医学会会長諮問委員会「苦痛度判定と安楽殺に関するガイドライン」作成委員会
.....委員：岸本(真)
- 日本野生動物医学会 ニュースレター編集委員会.....委員：後藤
- 「野生生物と社会」学会 学会誌編集委員会.....委員：岸本(真)
- 「野生生物と社会」学会 青年部会.....役員：本橋・渡邊
- 「野生生物と社会」学会 ワイルドライフ・フォーラム誌編集委員会.....副編集委員長：本橋
- 日本生態学会 保全生態学研究編集委員会.....委員：岸本(康)
- IUCN / Species Survival Commission (SSC) / Primate Specialist Group / 日本グループ.....メンバー：白井
- TWS / The Wildlife Society / International Wildlife Management Working Group.....委員長：大西
- TWS / Southeast Section of TWS.....秘書：大西
- TWS / The Wildlife Society / TWS Japan Student Chapter.....とりまとめ役：大西
- 野生動物の形態、生理、生態等に関わるデータ・試料の蓄積
- 野外における野生動物の麻酔方法の検討

『FIELD NOTE』は会員の皆様の情報交換の場です。

各種お知らせ・イラスト・原稿・ご意見・ご感想を募集しています。

内容・分量・書式は問いませんので、お気軽にお寄せ下さい。

編集部一同、お待ちしております。

次号No.166は2025年4月末発行予定です。

原稿は4月10日までにお寄せ下さい。

FIELD NOTE
フィールドノート
2025. 1. 31 No. 165

発行：WMO／（株）野生動物保護管理事務所
〒192-0031 東京都八王子市小宮町922-7
TEL 042-649-1385 FAX 042-649-1386
URL <https://wmo.co.jp/>
E-mail WMO_fn@wmo.co.jp
発行責任者：奥村忠誠
編集：『FIELD NOTE』編集部
郵便振替：00140-4-63739 年会費：¥2,000

無断転載を禁ずる